

翻訳と聞き手・読み手の視点 共同注意を軸とした日独語対照研究

大藪正彦

1. はじめに

本稿は、翻訳の問題を、「事態」「話し手 (語り手)」「聞き手 (読み手)」という三項関係から論じるものである。とりわけ、先の成田論文で取り上げられた事態把握の問題との関連で、日本語では、話し手のみならず、聞き手も話し手と視点を合わせ、事態の中に臨場する傾向があることを述べる。

ある事態を言語化する際、話し手は、対象となる事態をどこから眺め、そのどの部分を取り上げ、そしてそれをどのように言語化するのかという一連の決定を主体的に行う。この関連で日本語を特徴づけている重要な点は、日本語では、ドイツ語と比べ、事態を「自己中心的」な視座から捉え、「見え」のままに言語化する傾向が強いということである。そうであるとすると、そのような言語が聞き手を含めたコミュニケーションの場でうまく機能するためには、それを補うような仕組みが働いているはずである。Hinds (1987) によって指摘された「聞き手 (読み手) 責任」はその一つであろう。ただし実際には、話し手側でも、自らの「見え」を聞き手に共有させようとする様々な言語手段を用いている。

本稿では、「共同注意」と呼ばれる発達心理学の概念を援用しながら、視点の取り方に関する日独語の特徴的な相違を考察する。対象に他者といっしょに注意を向け、それを共有しようとする「共同注意」は、人に共通に見られる行動であり、関連した言語現象も日独語の双方で見出される。その上でなお、日独語間において有意な差が認められるというのが本稿での主張である。具体的には、日本語らしいとされる一連の表現、例えば、無助詞 (これ、お土産です)、「のだ」(金沢に行ったのですか)、「ね」や「よ」(このお菓子、おいしいですね/よ) などの使用を、ドイツ語の対応表現と対照しながら考察していく。また、視点の取り方は言語以外の文化的な現象にも深く関わっていると考えられるが、その点についても本稿の最後に若干言及するつもりである。なお、本稿では特に誤解が生じない限り、「話し手」「聞き手」にそれぞれ「語り手」「読み手」も含めて考えるものとする。

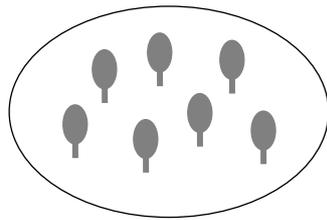
2. 言語化されない主体——見えない自己

知覚されたある一つの事態に対し、人は複数の見方を同時に取ることができる。また、言語の側でも、一つの事態について、複数の表現の仕方を可能にしている (例えば Tomasello 1999)。これはもちろんどの言語 (の話し手) にも共通して言えることである。しかしながら、他方で、事態の捉え方や言語化の仕方に関して複数の選択肢がある場合、どのような捉え方・言語化が特定の言語の話者によって好んで採られるのかという視点も——とりわけ個別言語を記述しようとする作業においては——欠かすことができない。先に述べた通り、この関連で近年複数の研究者によってなされた重要な指摘は、日本語では、英語やドイツ語などのヨーロッパ言語と比べ、事態を「自己中心的」(egocentric) な視座から捉え、「見え」のままに言語化する傾向が強いということである¹。本節では、議論の出

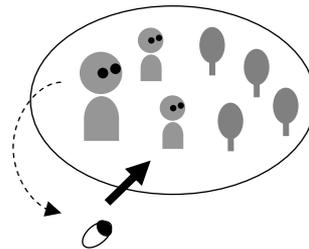
¹ 代表的なものとして、池上 (2003, 2004), 本多 (2005) など。アプローチの仕方は異なるが、金谷 (2004),

発点として、この点をまず具体例で確認しておきたい (以下、例文の下線はすべて本稿の筆者による)。

- (1) a. 今は武蔵の国になりぬ。(更級日記)
 b. Jetzt waren wir in der Provinz Musashi. (U. Kemper 訳)
- (2) a. まづ高館にのぼれば、北上川、南部より流るる大河なり。(芭蕉「おくのほそ道」)
 b. Wir stiegen zuerst auf den Takadachi-Hügel, wo wir den Kitakami-Fluß betrachten konnten, der aus der nördlich gelegenen Nambu-Gegend kommt. (G. S. Dombrady 訳)



【図1】「今は武蔵の国になりぬ」
 (「自己中心的」な視点)



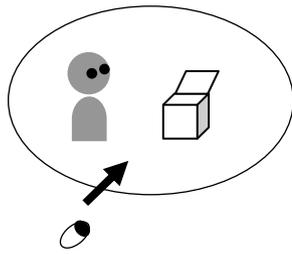
【図2】„Jetzt waren wir in Musashi“
 (「自己分裂的」な視点)

(1a) では旅をしている語り手が見た風景の変化がそのまま言語化されており、それにより旅をしている一行が「武蔵の国」に至ったことが表現されている。移動主体は言語化されていない。一方、ドイツ語訳 (1b) ではこの移動主体が客体化され、言語化された格好となっている。これを簡単に図式化したものが図 1, 2 である。日本語の方では「自己中心的」な視点が取られている——「自己」は見えない——のに対し、ドイツ語では自分を把握している自分がいるという、いわば「自己分裂」の構図になっている (詳細は Ozono 2008)。続く (2) も同様の対比が見られる例である。原文の日本語の方では語り手の見た風景がそのまま言語化されているだけであるのに対し、ドイツ語訳の方では風景を見ている主体が wir として客体化され、さらに「見ることができた」という知覚に関する部分も言語化されている。

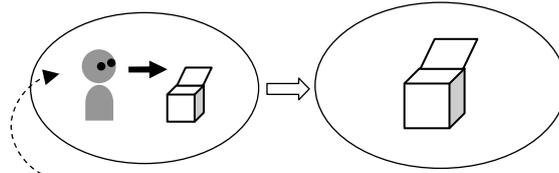
この傾向はドイツ語から日本語訳へという逆の方向でも確認できる。

- (3) a. [Und nun öffnete er das Paket [...]] Er fand großartige Sachen darin [...] (E. Kästner: *Das fliegende Klassenzimmer*)
 b. すばらしいものがはいていました。(高橋健二訳)
 c. 中には、すばらしいものがはいていました。(山口四郎訳)
 d. なかには、すばらしいものがつまっていた。(若松宣子訳)
 e. すばらしい物が詰まっていた。(丘沢静也訳)
 f. すごいものがはいていた。(池田香代子訳)

森田 (2006), 熊倉 (2011) などでも同様の議論が展開されている。ドイツ語との関連では Ozono (2008) のほか、本論集所収の成田論文も参照。



【図3】 „Er fand großartige Sachen darin“
 (「客観的」な視点)



【図4】 「すばらしいものがはっていました」
 (「自己投入的」な視点)

登場人物 (3 人称) がプレゼントの小包を開け、その中身を見るという場面である。ドイツ語の原文では、知覚主体が *er* という代名詞で明示化され、また「見つけた」という知覚も明示的に言語化されており、全体の状況が「客観的」に描写された形になっている (図 3)。一方、日本語訳では、知覚主体も知覚という事象も明示的には言語化されておらず、知覚主体にとっての「見え」がそのまま描写されただけの「自己中心的」な視点が取られている。上には筆者が参照することのできた日本語訳をすべて挙げたが、そのいずれにおいても同様の処理がなされていることが分かる。ここで注目すべき点は、語り手の視点の取り方である。描写されているのは登場人物 (3 人称) の知覚状況である。それにもかかわらず「自己中心的」な視点が取られているということは、語り手は問題の状況を登場人物の「見え」を通して、すなわち登場人物の視点に自らの視点を同化させて描写しているということになる。「自己投入」が認められる状況であり (図 4), 先の「自己分裂」と対比的である。

さて、日本語の話し手が「自己中心的」な把握に基づく発話を好むとすると、聞き手の方ではその視点をどのように理解するのであろうか。この点についてまず思い浮かぶのは、Hinds (1987) の指摘した「聞き手責任」という考え方であろう。つまり、日本語では聞き手がコミュニケーションの成功のために協力的に振る舞うというものである。しかしながら、詳しく見ていくと、実際には話し手の側においても、自らの「見え」を聞き手に共有させようとする様々な言語手段を用いていることが分かってくる。以下、両者の間の相互理解を支えるそれらの仕組みについて、順を追って見ていきたい。

3. 聞き手・読み手の振る舞い——客観的な読みと自己投入的な読み

前節では日本語話者が「自己中心的」な視点を取る傾向があることを述べたが、このことは、話し手がある事態を言語化する場合にのみ認められるのではない。聞き手・読み手の振る舞いに関しても同様の傾向を認めることができる (池上 2011: 58 も参照)。具体例で見てみよう。

- (4) a. くまは、あるきだしました。森をぬけ、川べりの土手にのぼると、草はあおあおとしげり、川はきらきらひかっていました。(湯本香樹実「くまとやまねこ」)
- b. Der Bär machte sich auf den Weg. Er ging durch den Wald und kletterte eine Böschung hinauf. Dahinter wuchs dichtes Gras und ein Bach glitzerte. (U. Gräfe 訳)

ここでは「くま」(3 人称) の移動とその周囲の情景が描写されている。一見、単なる情景

描写のようである。しかしながら、我々日本語話者がこの一連のテキストを読む際の視点の取り方を内省してみるとどうであろうか。平均的な日本語話者は「くま」の視点に同化して読むのではないかと思われる。つまり、単なる情景描写としてではなく、「くま」の目に映る情景として、自らもその感情の起伏を追体験するような形で読むということである。一方、ドイツ語話者がこのドイツ語訳を読んだ場合、ほぼ日本語と平行した訳文になっているにもかかわらず、「くま」が移動している様子とその周囲の情景が描写されているテキストとして読むのがふつうのようである。つまり、ドイツ語話者が、描かれた状況をいわば「舞台の外」から距離を置いて眺める——「客観的」な読みを選択する——のがふつうであるのに対し、日本語話者はしばしば自らを描かれた状況の中に臨場させる——「自己投入的」な読みを選択する——傾向が認められそうであるということである。

もっとも、この場合は言語的な要因を指摘することもできる。日本語のテキスト後半部における接続助詞「と」の使用である。一般に「と」は(継起的)時間関係や仮定条件などを表すが、考えてみれば気づく通り、ここでは客観的な時間関係や仮定条件が表されているわけではない——「くま」が土手をのぼってもものぼらなくても、草はあおあおとしげり、川はきらきらひかっていたはずである。つまり、ここでの「草はあおあおとしげり…」部分は、土手をのぼった主体「くま」にとっての主観的な「見え」の変化を、時間軸に沿った形で描写しているのだと言える²。すなわち、日本語の読み手は、半ば必然的に「くま」の「見え」を追体験して読んでいるとも言える。なおドイツ語では、この部分は *dahinter* という客観的な空間関係に置き換えられている。

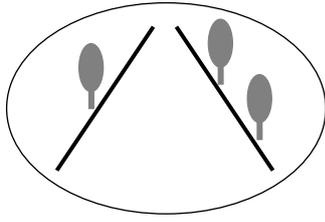
客観的な読みと自己投入的な読みということ言えば、両者の対立が最も際立った形で見出されるのは俳句であろう。例として芭蕉の句を取り上げてみる。

- (5) a. ^{このみち}此道^{ゆくひと}や行人なしに秋の暮 (芭蕉)
b. Diesen Weg
geht niemand
an diesem Herbstabend. (D. Krusche 訳)

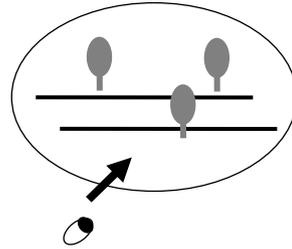
日本語話者にとっては、芭蕉自身が「この道」を行く人であり、その芭蕉が目の前に見ている道について述べているのだということは殆ど自明のことに思える。しかしながら、平均的なドイツ語話者にとって、このドイツ語訳はある任意の道の様子を描写しただけのものでしか受けとめられないようである(次の図5と図6の対比を参照)³。

² この「と」の用法については、すでに豊田(1979)に指摘がある。本田(2005: 190ff.), Ozono(2008: 85f.)も参照。

³ 金田一によるエッセイに次のような一節がある。「[...]先に触れたドイツ人が理屈っぽいことには、『ぼくは昨夜実験室に行ったが誰もいなかった』と言うと、『お前がいたじゃないか』と言うそう。ドイツ人はその場合『ぼくは昨夜実験室へ行ったが、そこにはぼく以外には誰もいなかった』と言うのだそう(金田一 2003: 189)。この指摘にはやや誇張が含まれるが——つまり、„Niemand war da“というドイツ語の表現が許容されないわけではないが——、日独語の母語話者の視点の取り方の傾向の違いをエピソード的に語っているものと言えよう。この話を踏まえると、上の芭蕉の句は、„Diesen Weg / geht niemand außer mir / an diesem Herbstabend“のように訳すことも可能である。しかしながら、これでは、俳句の持つ臨場的な側面——すなわち、読み手が自らを書き手と同じ場面に置いてみて、その気持ちを追体験し、感動を分かち合うという重要な側面——が失われてしまうことになる。



【図5】「この道や行く人なしに…」
 (「自己投入的」な読み)



【図6】„Diesen Weg geht niemand ...“
 (「客観的」な読み)

この句を訳した **Krusche** 自身が、巻末の解説でわざわざこの句の解釈の仕方を説明しているのが興味深い。長くなるが以下に引用しておく。

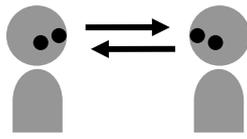
俳句では、それを語っている人自身についての言及が全くなされないということがよくあるが、それにもかかわらず、その句をきちんと理解するためには、その人がその句の状況の中にも存在していると解さなければならない。芭蕉の俳句、

この道や行く人なしに秋の暮

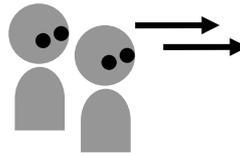
は、一見何の意味もなさそうな俳句の一つである。一本の道が見える。そしてその道について、誰も行く人がいない、と述べられる。まあいいだろう、つまり誰もいないということだな、とでも言いたくなる。それでよしとしておこうではないか、と。しかしながら、俳句を追体験しながら具体化していくという作業はようやくそこから始まるのである。目の前の道を見て「この道や行く人なしに…」と述べているその人はつまり、同時にその道を歩いている人である。その道を「誰もいない道」と認識している自己は、同時に、これこそが自分の道であり、自分にとってはこれが唯一の道であるということを知っている。そしてそれは秋の中で夕暮れへと通じている道なのだ。その道がどのような様子をしていて、どこへ向かうのかということを知っている。そしてその道を行くしかないということも分かっている。それは運命の体験だ。そのことについてこの俳句は述べているのである。(Krusche 1994: 117; 訳は筆者)

4. 共同注意

聞き手・読み手の側からの積極的な読みへの関与ということに話が及んだ段階で、話し手と聞き手という二つの主体の関わり方について概観しておきたい。浜田 (1999) は同じ身体を持った人どうしが出会ったときの心のあり方——身体と身体が出会った際の心性の構図——を二つに分けて説明している。一つは相互に能動と受動をやり取りすること、もう一つは相互に同じ型を取ることである。視点の問題に絡めて言うと、前者は典型的には「目が合う」ということ、後者は「いっしょに見る」ということになる (図7と図8)。



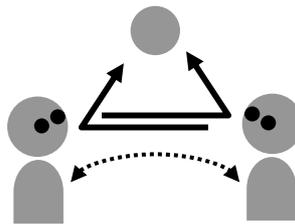
【図7】目が合う
(≠目を見る)



【図8】いっしょに見る
(≠同時に見る)

「目が合う」というのは単に「目を見る」というのとは違う。例えば医者が患者の目を診察するような場合を考えてみるとよい。「目が合う」というのは目に「主体」を感じるということである。それと同じことが「いっしょに見る」というときにも起こる。「いっしょに見る」というのは同じものをただ「同時に見る」というのとは違う。ある対象をいっしょに見ているとき、人はある対象を見ながら、相手もまた同じ対象を見ていることを見ている。つまり同じ対象を見ている「主体」の存在を感じ取っているわけである。ここまで来ると、発達心理学で言われるところの共同注意というプロセスに行き着く。

「共同注意」(joint attention)⁴とは、他者といっしょに同じものに、同じように注意を向けることであり、事物を仲立ちとして複数の人間の間に意図や感情の面でつながりを生み出す間主観的なプロセスである(図9を参照。破線は心理的なつながりを表している)。



【図9】典型的な共同注意場面

発達心理学の分野では、共同注意は乳幼児の精神発達の諸側面と密接に関連し、重要な役割を担っていると認識されている(Tomasello 1999, 大藪 2004 など)。本稿では、以下、共同注意と言語現象の関係を、いくつかの具体例に沿って見ていきたい。共同注意は、もちろん人に共通に見られるプロセスであり、関連した言語現象も日独語の双方で見出される。それを踏まえた上でなお、日独語間において有意な差が認められるということが本稿の主眼となる⁵。

5. 事例研究

5.1 無助詞

周知の通り、日本語では名詞に助詞を付加することで文法関係が示されるが、実際の言

⁴ 日本語ではほかに「共同注視」と呼ばれることもある。Tomasello (1999) のドイツ語訳では „gemeinsame Aufmerksamkeit“ という訳語が用いられている。

⁵ 共同注意と言語現象の関係を扱った先行研究としては、本多 (2003, 2011), Ozono (2012) などがある。前者は日英語、後者は日独語における異同について取り上げている。

語使用の場面を観察すればすぐに気がつく通り、とりわけ話し言葉では助詞の付かない名詞が用いられるということが頻繁に起こる。近藤 (2009a) は、日本語教育の観点から、助詞が使用される場合と使用されない場合では意味の違いがあり、自然な日本語の運用のためにはこれらの使い分けの習得が不可欠であると指摘している。例えば、お土産を手渡すような場面では、「これ、お土産です」のように助詞は用いないことがふつうである。副助詞の「は」を添えて「これはお土産です」と言った場合、「だから食べないでください」のような特別なニュアンスが加わる。無助詞と助詞「は」の違いを、本多 (2009: 129) は、共同注意という概念を用いて次のようにまとめている。

無助詞 — 聞き手の注意が向いていない対象を題目として提示することにより、その対象に聞き手の注意を向けて共同注意を確立する。
「は」 — 聞き手の注意がすでに向いている対象を題目として提示することにより、その対象に対する共同注意を確立する。

相手の注意の向き方に応じて、異なる表現形式が用いられているということであるが、特に無助詞で用いられる名詞句は、相手の注意をその指示対象に向けるということから、指差し機能と対比できるような機能を有しているということが言える。以下の例に見る通り、通常この点がドイツ語で訳し分けられることはない⁶。

- (6) a. 「ねえ、これ素敵なシャツでしょう？」とレイコさんが言った。(村上春樹「ノルウェイの森」)
b. „Ist das nicht eine schicke Bluse?“ fragte sie mich. (U. Gräfe 訳)
(7) a. 「あつ、これはなぞなぞじゃないよ。」(吉本ばなな「キッチン」)
b. „Keine Angst, das soll kein Rätsel sein.“ (W. E. Schlecht 訳)

(6a) は聞き手の注意を向けようとする対象に対して用いられている「これ」、(7a) は既出事項を指示して用いられている「これ」であり、本多の説明と合致している。

5.2 「のだ」

いわゆる「のだ」構文は近年様々な形で議論されている⁷。日本語教育においても扱いの難しい項目であるが(菊地 2000)、「のだ」の使用は表現の自然さと直接的に関わるため、必ず学ばなければならない項目である。例えば、明らかに金沢のものと分かるお土産を受け取った場合の発話として、「金沢へ行きましたか」はかなり不自然である。この場合「金沢へ行ったのですか」と言わなければならないが、「のだ」の使用はほぼ義務的であると言ってよい。母語話者であれば無意識的に使い分けしている「のだ」であるが、菊地 (2000: 36) は

⁶ ただし聞き手の注意の向き方と関連するドイツ語の構文として、いわゆる自由テーマ (Das Buch da, ich glaub ich kenne den Autor) や左方移動 (Das Buch, das habe ich doch gestern zurückgebracht) を挙げることができる。やや特殊な構文であるためここでは立ち入らない。Ozono (2012) を参照のこと。

⁷ 本論集所収の宮内論文でも詳しく論じられている。本稿では中核的な用法のみを論じる。なお、ここでは「のだ」で代表させるが、バリエーションとして、「んだ」「のです」「んです」「の」などがある。疑問文では「のか」「のですか」「んですか」「の」などが用いられる。

その基本的な機能を次のように説明している。

「のだ」－ 共有されている知識・状況に関連する、未共有の付加的な情報を補うときに「のだ (んです)」を使う。

先の例で言うと、話し手と聞き手の間で「金沢のもの分かるお土産がある」という状況が共有されている。その状況を目の前にして付加的な情報（金沢へ行ったのか）を求めるという発話なので、「のだ」の使用が義務的になるということである。すぐに気づく通り、話し手・聞き手が知識や状況を共有するというのは、共同注意が成立しているということにはほかならない。この点を踏まえ、近藤 (2009b) は、「のだ」の適切な使用と理解のためには聞き手の「共同注意」と協調的な行動が前提とされると述べている。簡潔に言えば、「のだ」構文とは話し手と聞き手が「同じ方向を見ている」表現であると言えよう。これが失敗すると——知識・状況の共有が一方向的に前提とされているということから——ぶしつけな印象を与えることになる⁸。

上で「関連する、未共有の付加的な情報を補う」と述べられている「関連する」こととは、菊地 (2000: 30) によれば、特に厳しい制約はなく、およそ何らかの関連があればよい。具体的には、例えば「理由」や「背景」などが述べられることになる。実際、「のだ」の代表的な用法として「理由」や「背景説明」などが挙げられることが多いが、このように見てくると、「理由」や「背景説明」を表す「のだ」の用法は、「未共有の付加的な情報」がたまたま「理由」や「背景説明」である場合と捉えることができる (菊地 2000: 32)⁹。

「のだ」に対応するドイツ語の訳文を見てみよう。「のだ」の「の」は本来先行する節を名詞句相当にする機能を担っている。そのため、直訳風にドイツ語にするならば、„Es ist (so), daß ...“ とでも訳せそうであるが、このドイツ語の構文は実際には稀である。

- (8) a. ある朝、くまは ないていました。なかよしのことりが、しんでしまったのだです。(湯本香樹実「くまとやまねこ」)
b. Eines Morgens weinte der Bär. Denn sein Freund, der kleine Vogel, war gestorben. (U. Gräfe 訳)
- (9) a. 「町から町へと旅をして、バイオリンをきいてもらうのがぼくのしごとなんだ。」(湯本香樹実「くまとやまねこ」)
b. „Ich ziehe von Ort zu Ort. Mein Beruf ist es, anderen auf der Geige vorzuspielen.“ (U. Gräfe 訳)

両者とも絵本からの引用である。「知識・状況の共有」という点に関して確認しておくとし、地の文である例文 (8a) では、語り手と読み手の間で「くまがないているということ」が、

⁸ 一方で、適切に使用されれば「のだ」の使用はやわらかい印象を与えることもある (例えば、誤解している相手に対し「こちらです」ではなく、「こちらなんです」と言うような場合)。その理由として、菊地 (2000: 36) は「「のだ」の性格が、ある種の〈共有〉感、心理的な一体感をもたらす」ことを挙げている。

⁹ 「のだ」と「からだ」の違いとしては、(1)「のだ」が表すのは理由に限らない、(2)「からだ」は言語化されている対象にしか使えない、などを挙げることができる (菊地 2000: 43)。

会話文である例文 (9a) では、登場人物の「くま」と「やまねこ」の間に「やまねこがバイオリンをひくことができるということ」が、それぞれ共有されている¹⁰。「のだ」の持つ機能、ニュアンスを個々の事例に応じて訳出することはもちろん可能であるが (例文 (8) の「理由」など)、「知識・状況の共有」という観点から用いられる構文であるという点で、「のだ」構文に直接対応するドイツ語の構文はないと言ってよいであろう。

5.3 終助詞「ね」「よ」「な」

共同注意との関連で取り上げられる項目に日本語の終助詞がある (守屋 2009a, 本多 2011)。聞き手の注意の向き方に応じて複数の助詞が使い分けられるというものである。例えば、お菓子を食べているという状況で、話し手も聞き手も同じお菓子を食べている場合は「このお菓子おいしい (です) ね」、話し手だけが食べている場合は「このお菓子おいしい (です) よ」という表現が自然であり、しかもこの場合の助詞の使用はほぼ義務的である——「このお菓子おいしいです」「はい、おいしいです」という対話は大変座りが悪い。使われる状況や発話意図によってニュアンスは異なってくると思われるが、守屋 (2009a: 144f.) および本多 (2011: 140) による説明をまとめると、概ね次のようになる。

「ね」 — 聞き手の注意に対し追隨的。「共同注意」を求める・確認する。
「よ」 — 聞き手の注意に対し誘導的。「共同注意」を目指す。
「な」 — 聞き手が関心を寄せることを期待。ただし具体的な「共同注意」は求めない。

大雑把に言って、「ね」と「よ」では、前提とされている聞き手の注意の向き方が異なると言ってよいであろう¹¹。「な」については、具体的な共同注意を求めないという点で独り言のような印象を与えるが、聞き手の関心を引こうとする話者の気持ちが伺える (例えば「このお菓子おいしいなあ」)¹²。以下、具体例を挙げておく。

- (10) a. 「ねえ、ことり。きょうも『きょうの朝』だね。きのうの朝も、おとといの朝も、『きょうの朝』って思ってたのに、ふしぎだね。[...]」(湯本香樹実「くまとやまねこ」)
b. „Weißt du, kleiner Vogel“, hatte er gesagt, „heute ist heute, aber gestern und vorgestern haben wir auch heute gesagt. Ist das nicht seltsam? [...]“ (U. Gräfe 訳)
- (11) a. 「ぼく、れんしゅうするよ。おどりながら、タンバリンをたたけるようになりたいな」(湯本香樹実「くまとやまねこ」)
b. „Ich werde üben. Ich möchte das Tamburin schlagen können und vielleicht kann ich dann auch dazu tanzen.“ (U. Gräfe 訳)

¹⁰ テキストには挿絵が添えられており、状況についての情報が視覚的にも補われる形となっている。もちろん挿絵がなくても、「知識・状況の共有」は言語化された内容 (先行文脈) により形成され得るものである。

¹¹ 「ね」については「情報の縄張り」(神尾 1990) との関連が思い起こされるが、これについては Ozono (2012) を参照。本論集の宮下論文でも証拠性の観点から関連現象が論じられている。

¹² 実際に聞き手が存在しない文字通りの独り言の場面では、これらの終助詞はここでの説明とはやや異なった機能を帯びることになる。廣瀬/長谷川 (2010: 73ff.) に詳しい。

「のだ」の場合と同様、聞き手の注意の向き方に応じたドイツ語の対応表現は直接的には存在しない¹³。もちろんここでも終助詞によって表されるニュアンスを個別に訳出することは可能である。例えば、例文 (10) の「ふしぎだね」は、ドイツ語訳では *nicht* を含む否定疑問という形で訳されているが、これにより、原文の持つ、聞き手の共同注意を確認しようとするニュアンスが表現されていると考えることができる。

5.4 感動詞

いわゆる感動詞 (間投詞, 感嘆詞) の使用も共同注意と関連している。例えば「あ, このお菓子おいしい」と言えば——単に「このお菓子おいしい」と言う場合と比べてみると分かる通り——聞き手の注意を引き、話し手と聞き手による対話へとつながっていく可能性が生じる。つまり、「あ」は単にある事態の認知 (気づき) を個人的に——つまり独り言のように——表出しているのではなく、その場に居合わせる者を共同注意へと向かわせる機能を持つということである。守屋 (2009b: 148) では、日本語の感動詞による語りかけの度合いが次のように説明されている。いくつかを簡略化した形でここに挙げる。

「共同主観性」を前提とし、
「あ！」 — 「見え」を認知し表出
「おっ！」 — 「共同注意」態勢にある他者が「見え」を認知し感情を表出
「ん？」 — 別の他者が「見え」を認知できないことを表明
「えっ？」 — 新たな事態を認知し感情を表出

日本語の話し言葉ではこれらの感動詞が頻繁に用いられる。特に何かに気づいたことを表出する際の発話では、これらの感動詞を伴うことがほとんどである。例えば雨が降っていることに気づいたときの日本人の自然な発話は「あ, 雨 (降ってる)」であろう。このような点からも、日本語話者が共同注意を志向する傾向が強いということが見て取れる。以下、具体例を挙げておく。

- (12) a. 「あ」山下が、空を見上げた。「雨だ」 (湯本香樹実「夏の庭」)
b. „Ach nein!“ Yamashita schaut zum Himmel hinauf. „Es regnet!“ (Y. Koyama- Siebert 訳)
- (13) a. あれ!? ゆきが ふってないよ! / 「ママ, ママ, そとに いていいでしょ。ゆき やんでるよ。」 (酒井駒子「ゆきがやんだら」)
b. „Guck mal! Es hat aufgehört!“ / „Mama, Mama, jetzt darf ich doch raus?“ (U. Gräfe 訳)

(13) では、日本語「あれ! ?」の部分がドイツ語で „Guck mal!“ となっており、共同注意への志向がより直接的に訳出されている点が興味深い。ところで、(13a) の前半部分は鉤括弧のない形での表記になっており (いわゆる自由直接話法), 主人公が心の中でつぶやい

¹³ ドイツ語の心態不変化詞の使用に関して、聞き手との関連性が指摘されることがあるが (Ickler 1994), 日本語の終助詞との違いとして、例文 (10), (11) に見る通り、差し当たりその義務性を挙げることができるだろう (Ueki 1993: 230f. も参照)。共同注意という観点から見た心態不変化詞の機能は興味深い、今後の課題としたい。

た内言とも、思わず口に出た独白的な発話とも取れる。自らの語感を内省してみるならば、これはおそらく誰かに直接語りかけられた発話ではない。しかしながら、日本語では、そのような発話であってもコミュニケーション的な機能を持ち得るという点は注意を払っておいてよいであろう。

6. おわりに——異なる言語・文化の理解のために

以上、視点の取り方に関する話し手・聞き手の振り舞い方について、日本語とドイツ語を例にして見てきた。日本語の話し手は、ドイツ語の話し手に比べて「自己中心的」な視点から事態を把握し、言語化する傾向が強いが、聞き手の側でも——考えてみれば当然のことであるが——話し手の発話を「自己中心的」な視点から発話されたものとして理解する傾向が強い。ただし、「聞き手責任」という考え方で指摘されたように、聞き手が一方的に話し手の視点に歩み寄るというだけでなく、話し手の側でも、聞き手の視点に注意を払い、様々な言語手段を用いてお互いの視点が合致するよう調整している。それらの言語手段の義務性という観点から言って、日本語は体系的にそのような仕組みを備えているのだということが言えよう。

簡潔に言ってしまうと、日本語の話し手と聞き手は「いっしょに見る」という形での対話を好むということが言える。ただし、この点についてはもう少し説明が必要である。というのも、ドイツ語の話し手と聞き手も、ある事態について話をするとき、「いっしょに見て」話をしているということが言えるからである。両者の違いは、比喩的な表現を用いるならば、次のような構図で説明することができるだろう。つまり、ドイツ語では、舞台の上で起こっている出来事を話し手と聞き手が舞台の外からそれぞれの目で見、それについて舞台の外から話をしているという構図であるのに対し、日本語では、出来事が起こっているその場（舞台の上）に話し手と聞き手が臨場し、さらに両者が視点を合わせながら話をしているという構図である¹⁴。すなわち、「いっしょに見る」というときに、日本語母語話者は、臨場的に、視点を重ね合わせながら見ているという点が重要である。

視点の取り方についての理解は、異文化間のコミュニケーションの際に生じる問題にも有効な説明を提供できると思われる。最後に、この点について若干の具体例とともに見ておきたい。まずは言語的な例である。

(14) a. あ、人が倒れている。

b. Hier liegt jemand. — 清野／山田 (2011: 12)

独作文の学習書から取った例であるが、当該箇所には、この例文に続き、この文をドイツ人に見せたときのコメントが次のように紹介されている。

[...] さらに、そもそもどういう時にこの文を言うのかと尋ねられたので、人が倒れているのを見てびっくりして言うと言ったら不思議がられてしまいました。ドイツ人は

¹⁴ この関連で、日本の能におけるワキという役割——観客が視点を合わせる拠り所となっていると見なすことができる——が思い起こされよう。熊倉 (2011: 174ff.) は、この点を捉えて「一人の主観を大勢でシェア」しているという言い方をしている。

倒れている人を見て、他の人にそのことを伝えるならともかく独り言として「人が倒れている」とは言わない、というのです。Ah とか Oh とか言うかもしれないが、びっくりして駆け寄るだけだと言うのです。(清野／山田 2011: 12)

これは、独り言のように発話してそれを理解してもらおうという日本語のコミュニケーションパターンの一つが正しく理解してもらえなかった例だと言えるだろう。補足しておくとして、この日本語の例では、先に取り上げた「あ」という感動詞が使われている。話し手は、これにより自分の新たな「見え」を表出し、共同注意態勢にある聞き手と「見え」を共有することになるわけである。従ってこの例は、典型的な対話を構成するものではないが、単なる独り言とも異なるものである。視点をめぐる日本語の話し手・聞き手の振る舞いを踏まえるならば、十分に説明のつく問題である(例文(13)における議論を参照)。

視点の取り方についての好みは文化的な問題にも見出すことができる。すぐに思い浮かぶのは、対話での視線の問題であろう。次は日本について書かれた実用書からの引用である。

目の合わせ方に気をつけてください。相手の目を直視し過ぎると、日本人は不安になることがあります。(Menge 2009: 75; 訳は筆者)

次の例もこれと平行したものであると考えることができる。日本で刊行されているドイツ語教科書からの引用である。

コンサートや芝居に遅れてきたとします。あなたの座席が列の中央にある場合、あなたは着席している人の前を歩いて自分の席まで行かなければなりません。そのようなとき、日本人は舞台の方を向いて通り抜けようとします。つまり、着席している人に対して背中を向けるわけです。これは正しいことでしょうか。[...]なるほど、考えてみると、着席している人にとって目の前にお尻を見せられるのは決して気持ちのいいものではありません。というわけで、これからは舞台の方にお尻を向けるようにしてください。(大谷／大谷 2010: 54; 訳は筆者)

いずれも本稿で述べた話し手と聞き手の視点の取り方の傾向が、日常的な人間関係のあり方や振る舞いに通じているものとして説明することができよう¹⁵。

さて、最後に再び翻訳という本論集のテーマに立ち戻るが、まったく自由な訳がなされているように見える場合でも、視点との関係でうまく説明できる場合がある¹⁶。

(15) a. Bald wurden die Schatten länger als sie selbst und sie fuhren nach Hause. (H. Heine: *Freunde*)

¹⁵ 北山 (2005) は、日本の浮世絵において「共に眺めること (共視)」という構図が特に好まれているという観察を出発点として、幅広い日本文化論を展開している。蛍、花火などの観賞をはじめ、さらに屋台、電車のシートなどにも言及がある。

¹⁶ 再び絵本からの例であるが、本論集の宮下論文に言及がある通り、原文に縛られる必要のない絵本では、その言語の特徴が出やすいということが言えそうである。

b. いつのまにか かげが ながくなった。3 びきの せたけよりも ほら こんなに。さあ
うちへ かえろう。(池田香代子訳)

絵本の末尾部分からの引用である。日本語訳は、一見、原文とはずい分異なった訳になっている——例えば、「いつのまにか」という話し手の印象を表す表現の使用、「ほら」「さあ」という感動詞の使用、「うちへ かえろう」という読み手を巻き込んだような表現の使用など。特に最後の文「さあ うちへ かえろう」は、原文では3人称主語・過去時制 (... und sie führen nach Hause) となっているのを一切無視したかのような自由な訳になっている。しかし両者の違いをあらためて確認してみると、これまでの議論で見てきた日独語の異なり方と平行していることが分かる。つまり、ドイツ語では、物語の状況が客観的に、舞台の外から描写されているのに対し、日本語訳では、登場人物(この場合は動物)、語り手、読み手の境界がなくなり、三者が渾然一体となった形で物語の中に入り込んでしまったかのような語りになっている。この訳が成功しているとするならば、それは日本語の話し手・聞き手が好む視点に寄り添った訳になっているからであると言えよう。

出典

Heine, Helme: *Freunde*, Weinheim: Beltz & Gelberg, 1982 (Neue Rechtschreibung). (『ともだち』池田香代子訳, ほるぷ出版, 1996.)

Kästner, Erich: 'Das fliegende Klassenzimmer', in: *Gesammelte Schriften, Bd. 7*, Köln: Kiepenheuer & Witsch, 1959 [Original 1933]. (『飛ぶ教室』高橋健二訳, 岩波書店, 1962; 山口四郎訳, 講談社, 2003 [1983]; 若松宣子訳, 偕成社, 2005; 丘沢静也訳, 光文社, 2006; 池田香代子訳, 岩波書店, 2006.)

村上春樹『ノルウェイの森』講談社, 1991. (*Naokos Lächeln*, übers. v. Ursula Gräfe, Köln: DuMont, 2001.)

尾形侑 (編): 『新編 俳句の解釈と鑑賞事典』笠間書院, 2000.

「おくのほそ道」= 『ビギナーズ・クラシックス おくのほそ道 (全)』角川学芸出版, 2001. (*Auf schmalen Pfaden durchs Hinterland*, übers. v. G. S. Dombrady, Mainz: Dieterich'sche Verlagsbuchhandlung, 1985.)

酒井駒子『ゆきがやんだら』学研教育出版, 2005. (*Es schneit!*, übers. v. Ursula Gräfe, Frankfurt a. M.: Moritz Verlag, 2006.)

「更級日記」= 『ビギナーズクラシックス 更級日記』角川学芸出版, 2007. (*Sarashina-Nikki. Tagebuch einer japanischen Hofdame aus dem Jahre 1060*, übers. v. Ulrich Kemper, Stuttgart: Reclam, 1966.)

吉本ばなな『キッチン』角川書店, 1998. (*Kitchen*, übers. v. Wolfgang E Schlecht, Zürich: Diogenes, 1994.)

湯本香樹実『くまとやまねこ』河出書房新社, 2008. (*Der Bär und die Wildkatze*, übers. v. Ursula Gräfe, Frankfurt a. M.: Moritz Verlag, 2009.)

湯本香樹実『夏の庭』新潮社, 1994. (*Gespenserschatten*, übers. v. Yoko Koyama-Siebert, Zürich: Nagel & Kimche, 1995.)

文献

浜田寿美男 (1999): 『「私」とは何か』講談社.

Hinds, John (1987): 'Reader Versus Writer Responsibility'. In: Connor, Ulla/Kaplan, Robert B. (eds.): *Writing across Languages*. Reading, MA: Addison-Wesley, 141-152.

- 廣瀬幸生／長谷川葉子 (2010): 『日本語から見た日本人』 開拓社.
- 本多啓 (2003): 「共同注意の意味論」 山梨正明ほか (編): 『認知言語学論考 No. 2』 ひつじ書房, 199-229.
- 本多啓 (2005): 『アフォーダンスの認知意味論』 東京大学出版会.
- 本多啓 (2009): 「コラム 無助詞」 池上／守屋 (編), 129-130.
- 本多啓 (2011): 「共同注意と間主観性」 澤田治美 (編): 『主観性と主体性』 ひつじ書房, 127-148.
- Ickler, Theodor (1994): ‘Zur Bedeutung der sogenannten ‘Modalpartikeln’’. *Sprachwissenschaft* 19, 374-404.
- 池上嘉彦 (2003; 2004): 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (1); (2)」 山梨正明ほか (編): 『認知言語学論考 No. 3; No. 4』 ひつじ書房, 1-49; 1-60.
- 池上嘉彦 (2011): 「日本語と主観性・主体性」 澤田治美 (編): 『主観性と主体性』 ひつじ書房, 49-67.
- 池上嘉彦／守屋三千代 (編) (2009): 『自然な日本語を教えるために』 ひつじ書房.
- 神尾昭雄 (1990): 『情報のなわ張り理論』 大修館書店.
- 金谷武洋 (2004): 『英語にも主語はなかった』 講談社.
- 菊地康人 (2000): 「「のだ (んです)」の本質」 『東京大学留学生センター紀要』 10, 25-51.
- 金田一春彦 (2003): 「日本語のこころ」 日本エッセイスト・クラブ (編) 『日本語のこころ』 文藝春秋, 187-190.
- 北山修 (編) (2005): 『共視論』 講談社.
- 近藤安月子 (2009a): 「これは名刺です」 池上／守屋 (編), 124-128.
- 近藤安月子 (2009b): 「忙しかったんですから」 池上／守屋 (編), 138-141.
- Krusche, Dietrich (Hg.) (1994): *Haiku. Japanische Gedichte*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- 熊倉千之 (2011): 『日本語の深層』 筑摩書房.
- Menge, Rita (2009): *Praxisführer Japan. Fettnäpfchen gekonnt vermeiden*. Würzburg: Königshausen & Neumann.
- 森田良行 (2006): 『話者の視点がつくる日本語』 ひつじ書房.
- 守屋三千代 (2009a): 「「いいお天気です」「そうです」」 池上／守屋 (編), 142-146.
- 守屋三千代 (2009b): 「「あっ!」「えっ?」」 池上／守屋 (編), 147-151.
- 大谷弘道／大谷ウルズラ (2010): 『新 ドイツ語読み方教室』 三修社.
- 大藪泰 (2004): 『共同注意』 川島書店.
- Ozono, Masahiko (2008): ‘Subjektive und objektive Auffassung. Zwei Raumauffassungsweisen in kontrastiver Sicht’. *Neue Beiträge zur Germanistik* 7 (1), 75-90.
- Ozono, Masahiko (2012): ‘Intersubjektivität im deutsch-japanischen Kontrast. Perspektivische Interaktion zwischen Sprecher und Hörer’. (Ms.)
- 清野智昭／山田敏弘 (2011): 『日本語から考える! ドイツ語の表現』 白水社.
- Tomasello, Michael (1999): *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 豊田豊子 (1979): 「発見の「と」」 『日本語教育』 36, 91-105.
- Ueki, Michiko (1993): ‘Problematik bei der Übertragung von deutschen und japanischen Fachtexten’. In: Frank, Armin Paul u.a. (Hg.): *Übersetzen, verstehen, Brücken bauen*. Berlin: Erich Schmidt, 228-236.